

震源の島で

大町 聡

1995年1月17日午前5時46分、私は淡路島・洲本市の曲田山という高台にある一人住まいの自宅で震災に遭った。当時、私は同市の神戸新聞淡路総局に記者として勤務していた。

昼夜が逆転していた休み明けのためか眠ることができず、居間で資料の整理をしているうちに朝を迎えようとしていた。その時起こった揺れは、体をかなりの力で左右に揺すぶられるような体験したことのない長い揺れで、一瞬遅れて地震だと気がついた。古い木造家屋だけに、倒壊の危険を感じ、机の下にもぐり込んだ。

揺れが収まり、棚からいくつかのものは落ちていたが、それほどの被害はなかった。まず頭に浮かんだのは、さらに大きい「本震」と津波の懸念だった。

その年の元旦から、戦後五十年の特集を淡路版で連載しており、大きな出来事の一つとして取り上げたのが、偶然にも昭和21年12月の南海道地震だった。この地震では四国、和歌山を中心に千三百人以上の死者が出ており、最大の被害は津波によるものだった。淡路島でも家屋倒壊などで五十人余りの死者が出た。年末に、地震の生き証人にインタビューし、最初の揺れでまず外に飛び出したところ、次の大きな揺れで家がつぶれた、という話をうかがっていたことが記憶に生々しかったのだ。また前年の夏には、藤田和夫先生とお会いし、有史以来活動の記録がない巨大断層「大阪湾断層」について初めて知った。神戸空港など活断層上に巨大プロジェクトが林立することへの警鐘の一文を書いていたのも、奇妙な符合を感じる。

本震を恐れて家から飛び出したが、まだ真っ暗で周囲の家も起き出す気配がない。少なくともここは高台で津波のおそれはない。しばらくして家の中に戻った。総局の三階に住む編集主任に電話をかけてみると、タンスが倒れて下敷きになっていたとのこと。「これは結構被害が出たな」と感じ、「すぐ行きます」と自宅から車なら五分とかからない総局に向かった。

案の定、事務所内はロッカーや本棚が倒れ、机の上にあった資料が散乱している。あとで考えると、私の自宅は山を削った切り土の上に建ち、総局の地盤は元海岸の埋め立て地で、地盤の差が大きかったのだろう。

テレビでは、震源が淡路島で洲本が震度6と速報が出た。とりあえず、総局のメンバーを呼び出し、情報を集めようと消防本部に向かった。途中、瓦が落ちた家を見ながらも、まだ死者が出るほどの地震だとは想像もしなかった。消防本部に島内各地から入る無線は道路の分断、さらに家屋の倒壊、閉じこめなど被害は拡大していく。北部の津名郡一宮町で重傷者が出たとの知らせで、若手記者を向かわせた。

社に戻ると、ホワイトボードに次々情報を書き込み、次第に死者の数が増えていくのにふるえがきた。そして、テレビで阪神高速道路が倒壊している映像が流れ、「なんだ、これは」とあっけにとられた。この間、三宮の新聞会館にある本社に連絡を取ろうと電話をかけ続けていたのだが、ずっと不通で、本社が全壊していたということは午後になって知ることになる。

この日から数カ月は殺人的な忙しさだった。

生存者の救助、避難所の設置、自衛隊の応援、ボランティアや救助物資、義援金、仮設住宅、がれき処理、土地区画整理事業など新たな問題が次々現れる。一方で、地震断層として注目された野島断層を中心に地震学者、地質学者の現地調査が始まっていた。

神戸新聞は本社を貸しビルに移し、京都新聞の助けを得ながら一度も休むことなく発行を続けたが、地方版を出す余裕はなかった。このままでは、淡路島の被害情報が地元紙に全く載らないことになる。総局では、洲本市の印刷業者に依頼して、折り込みの「臨時淡路版」を毎日発行することにした。原稿をワープロで印刷、切り張りする原始的な作業で、取材から戻って深夜までの編集作業を行い、また現場に戻る日々は、地域版の復活まで続いた。このような事態では本社からの応援は人もなく、現有のデスクと私を含め記者五人。一方、各社は四国などから数十人態勢の応援が来島している。物量の差がけた違いの状況だった。

その後の状況については、簡単に触れるにとどめるが、淡路島の被害は死者六十二人、負傷者千二百六十六人、家屋全壊三千四百六十六世帯、半壊五千三百三十六世帯。阪神間の被害に比べると被害は二けた少ないが、被害が最も大きかった北淡町の全世帯に占める全壊戸数の割合は六割を超えている。このほか、全国でも最多といわれる島内のため池の被害が巨額に上ったことは特筆すべきだろう。

避難所の解消が比較的早かったのは、人口が少ないうえもともと土地があり、親類が近くに住んでいるなど、都市部の住宅密集地に比べれば災害に対する環境が恵まれていることが最大の理由だろう。震災直後の救援については、大鳴門橋を通じて四国と結ばれていたことが大きな幸運だった。救援物資、ボランティアが大量に四国から流れ込んだことで、避難所の運営もスムーズだった。また激甚被災地のスーパーでも翌日から商品は豊富にそろっていた。もし流通ルートが神戸経由の船便に限られていたら、かなりの混乱が起きていたと思われる。

地震という「地質学的事件」を地理学徒出身の記者として取材した体験は、自分にとっても一生忘れられないものになるだろう。野島断層周辺を平野先生とともに歩き、ご指導いただいたこともあった。現在、私は本社の社会部に勤務するが、震災五年を前にして、全国平均よりはるかに高い失業率、二重ローン、復興住宅での孤独死など被災者にとっての復興はまだ道遠き感がある。震災直後は、兵庫県南部地震を皮切りに、日本列島が新たな地殻変動のサイクルに入ったことが地震学の常識として語られていたにもかかわらず、一般にはもう次の地震のことが忘れられたかのようだ。20世紀前半には訪れる南海トラフなどを震源とする巨大地震が、阪神淡路大震災の比ではない被害をこの国にもたらす。これは避けられないことなのだろうか。危険が指摘されながら先日地震空白域で起きたトルコ大地震は、阪神淡路大震災と同様、「人災」の側面を強めている。

「震災の教訓を基にした地震に強い社会を」と切望し、記憶を呼び起こしてこの稿を記しました。

(昭和58年卒業)